

夏之古説

二

231
69
5

準貴

今昔お法の四本は今昔小野道といふ人を
りう事はあつてりく隠波の島ははなはた船
りうとあきとて京より知る人のいふはく
りうははるばる

和名のころら八十島かして

とよして明石とよははちてちこれ船
波を船かして明石のとまりしりり
からいりくも京より人とい昔流人の家と
知かれりといわてお法之使はよよを母あ
れは是とわてゆふれや京よりゆりる



らるるお法のいふと今昔お流はうれは毎日
しりるお法のいふと人の海はひり
れしりるお法のいふと人の海はひり
は多くお島のあつてその隠波の島
隠波の島といふは
了即隠波の島といふは
さあめると京より人とい昔よりとた下
送れり人といふお法のいふと人の海はひり
長崎といふお島のあつてその隠波の島
よお法のいふと人の海はひり
このころら八十島かして

京の廣平より京の京
此京の京の京の京

改子藏集巻七 花巻と花巻佐佐木 俊成 八
海士の海女とてつる人 海女とてつる人
大僧正の御書 我とてつる人 海女とてつる人
あやふし人ともつる人 海女とてつる人
これにてつる人 海女とてつる人

あやふし人あり

この人よのいりからくを侍人 小所の花は
色いとこいりさの類うら

この海士の海女といふ言 復せて思と人とその海
辺又あるものよらへいふのこい伊せお流は

大徳のこらうもて 齊まのあれらうらふいひ
ら

しらめ列方やいことを 押して我を教よ海士の海女
けさう今く今とほい 海女とてつる人 海女とてつる人

集巻七 寄玉

底清 沉有玉手 欲見千遍 曾告之 潜為白水

或説又勅勅のさるれい人ともてつる人 海女とてつる人

あくしてはらあよつひかきつる人とあいあや
まねり管いけ時 送位下 刑部大輔 於り人

まて四位の父の菴もゆり 今深名とともいふも
六年の後まははと聴こいあさうらふ人あふ

先よあ如く妻よとともいひきか又の從よ家人
もあまはははは 祖傳まてまて 傳説とて

りる人も多かり ちよあうらふ人あふ
つうとすともいふとあやあくともいふとあ

議不定再三其事又初定船次才日扶取家者為才一
船分配之後再徑漂迴今一朝改易配當危器以已福
利代他害損論之人情是為送施既無面目何以寧下
皇家貧親老自又尅療是皇汲水採薪當致匹夫之孝
耳執論確乎不復駕船云云六年春三月遂以捍詔除為
庶人配流隱岐國在路賦請行吟七十韻云云此云
了也續日本後紀云義和五年三月遂懷幽憤作西
道謠以刺道唐之役也其詞率與多紀忌諱嵯峨天皇
覽之大怒令論其罪故有此靈請云云
續日本後紀又云義和七年二月云召流人小野篁同

七月小野篁入京被黃衣以拜謝之明年閏九月一
叙本位又漸昇進一十月十四年三月云從四位
下小野篁為參議とんて文德實錄仁安二年冬十月
就家授從三位云云

僧正遍昭

了は凡そのかのい流のあらよとこの公ありとて
古今集 雜上五節の素姫とてとてとてとて
岑宗貞とてとてとて新嘗會の時あるたは家
及人らとてとてとてとてとてとてとてとて
極官とてとてとてとてとてとてとてとてとて

いんのかーんしをいぬよりして製教とする
如くは設て之り

こととわい少女之如よ万葉集よ未通女初女とて
うりさくくさるいんしをいぬよりして天は少女のよ

いささくこととわいんしをいぬよりしてあすあすよとあまのあ
とと女のよとていんしをいぬよりしてあまのあ

ちとあまのあまたいんしをいぬよりしてあまのあ

の五節の文字ハ反付信ハ晋平侯ニ醫和曰節之先生之

示可以節百事也亦有五節 注云五聲之節也 一の樂よあこの節

ちあまのあまたいんしをいぬよりしてあまのあ

五年五月癸卯宴群臣於内裏皇太子親舞五節 云詔曰

天皇大命尔坐而奏賜之 掛母異文也 御原宮尔大

八洲所知 志 聖乃天皇命天下并治賜以平賜 此所思

坐久上下并齊 信和氣 无勤久静 知 令有 尔波 禮 等 樂

二都並 志 平久長久可有等隨神 母 所思坐 此 乃舞

乎始賜 比 造賜 比 伎 関食 互 與天地共 尔 絶事無久弥

継尔受賜 利 行 年 物 等 之 皇太子斯王 尔 学 志 云

是正史又始てんしをいぬよりしてあまのあ

しとあまのあまたいんしをいぬよりしてあまのあ

見原交より起りしるしとあまのあ

改之善清行の足見封...
天武天皇...
天のあま...
...

萬改有文粹善相公
封事

昔淨御系天皇を飛宮として...
天女々々として...
又夜神と...
...

この後又好みの...
多智詩志尔刀利波...
...

陽成院

はくくぬのきりなる川の川をけりて
後撰集志之けり友のみこよけりしる

約友のみこいりり紀畧云延長二年四月二日入

道二品綏子内親王豊光孝才二女也是約友のみこ

とくり約友院光孝の御正所のあそくお條小

東洞院東 拾叢抄 綏子内親王あそくおせしけけり

しのみこしししり けりあそく池のりしきさくは

ついであそくさくさくしり 約友のけりけりしは

おのらりしりしり あそくさくさく

改
約友院光孝天皇御所新の
あそくさくさくさく
申せりしりしりしり
とアしりしり

改
約友院光孝天皇御所新の
あそくさくさくさく
申せりしりしりしり
とアしりしり

この流波ぬのさくらなるあそくさくさく

いみまの川さくらさくらさくらさくらさくらさくら

切まじりせまふとさくら

この流波ぬぬの川さくらさくらさくらさくら根と

山嶽さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

ふくさ今集つるさくらさくらさくらさくらさくら

こいぬいさくらさくらさくらさくらさくらさくら

即山の頂上さくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

はくさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

其一二といく、万葉集卷廿四より石上零十方
西尔将園哉 古今集又も

酒のあめぬまのあひりす山城のといはきひむもを
これらをもあひりす人しあつと陸奥の信友郡よ
己招布を酒せしぬとよひ古方のくもとあひ
ぬ人のあひせり偽りしむしし布とあひ
何のなもすれぬ酒布也ぬ星もあひは
とのよぬれと招布貞せし事ぬあひむじ
招をあひくとしてしとあひむあひあひも
かしくよんくしとあひはあひとあひく

春日那う、この紫のとう衣あひのいされとよあひぬ

もともあひしし必しとあひのくならあひ
いあひうまも解し人くあひ 今のあひぬるニう
つあせしきとあひ
も又あひのものをあひてあひる あひあひ
さういしとのやうとあひさくあひもあひ
このあひのあひらとあひはとあひはく衣あああひとよ
ハ必黄古藍垣衣月草芽子等を何とあひくこと
あひしとあひらく人しあひらうの板よあひくのか
あひらとあひあひていろとあひとあひし
招布あひくことあひつとあひのよとあひし
招あひのあひあひの招よあひはあひくこと

こゝろをいひて何とやらよとやと始あり
おのゝしと忠家集とある人よ
白の布のいひとやらとやらと
始りて

うらたていひていひて我々の世よまじり増
いれとのまのいひとやらとやらと
始りてとえいひとやらと
よあるまといひとやらと又迄表式と梅れい
小松とやら小松とやらとやらと
横集とよいひとやらとやらと

かゝるものいひとやらと

あゝいひとやらとやらと
あゝいひとやらとやらと
あゝいひとやらとやらと
あゝいひとやらとやらと
あゝいひとやらとやらと
あゝいひとやらとやらと
あゝいひとやらとやらと
あゝいひとやらとやらと
あゝいひとやらとやらと
あゝいひとやらとやらと

文集麗山高ノ吟は 塙有衣分 薨有松分
文集麗山高ノ吟は 塙有衣分 薨有松分
文集麗山高ノ吟は 塙有衣分 薨有松分
文集麗山高ノ吟は 塙有衣分 薨有松分
文集麗山高ノ吟は 塙有衣分 薨有松分

源朝融於内表冠焉馬天皇抽筆叙正四位
下嵯峨太上天皇才八子大原氏所産也賜之
天皇令為子故有此叙同十五年右近衛中將
義佐守嘉祥三年從三位云以上續日本後紀貞觀十
四年左大臣寛平七年薨七十四三代實錄枝桑畧記等嵯峨天皇
の皇子源氏と云く弘仁五年五月勅あり
て信弘常明眞如潔姫全姫皆如此男女
六人始て多うとれり此の皇子も
け氏と云く融云才八子と云く男子云
才八の義なり

光孝天皇

君が為と云くあてしむるつむ我衣のよきなり
古今集巻上 仁和の帝みこはあらし
ましむる時よ人の若菜のひらる湯あり
け湯ありませまふ時の親王よませとも後より
天皇と稱せせまの湯とせよ先らりて
け多のひらるといせらりて此湯ありん
人い又この時あらしを忘る人一日集
記仁和の帝みこはあらしましむる時湯

着もあかしゆこととてしあはれとふいにあ
むらむらむら人なむとさちむおとよめや
さしささし人なむとさちむおとよめや
ては左大臣獨法えとてとてとてとて
し物もあはれとて子の息を法が細とて
とらむとてむむむむむむむむむむむ
河ちよめの人とてとてとてとてとて
す式説は聖のつらこととて古今の撰者の意
海はあはれ法師のまじりのむむむむ
つる代とてとてとてとてとてとてとて

春の歌入うぬい世説は古今の撰次もいれり去に和の
ゆいひんまむむむむむむむむむむむむむむむむ
あのかーまむむむむむむむむむむむむむむむむ
よ佐若菜上子日初初察并内法目らら月上の子日
さしとてむむむむむむむむむむむむむむむむむ
又徳実徳てあ元年四月云者由宴預之者不_過公に也
侍教十人昔に上月の中必有此の時謂之子日燕也
今日之宴修旧迹也これよはれは菜羹といんむむむ
本朝又釋ふ管賜大相國寛まの時昨上月子日宮人
に賜菜羹宴てふ文ありあはれむむむむむむむむむむ

よきる俗に物いとも驚きしと云ふは、今か好の事
定まらば後天唐康保の事までし、上の子日よころの事ゆり前
楚歳時記に三月七日俗以て程菜作食之無万病と云ふは、好せ
へりて、よきと云ふは、好せ
へりて、よきと云ふは、好せ

又昔一父、是流よ、遍昭信、云々、流ひ、る、村の、水、
うらと、うら、其、笑、い、即位、二年、二月、より、此、水、の、親、
の、水、の、親、と、い、ふ、春、の、物、お、し、と、ある、と、云、
こ、或、抄、に、親、と、い、ふ、事、と、い、ふ、事、と、い、ふ、事、と、い、ふ、事、
然、心、の、事、を、知、と、い、ふ、前、より、不、如、神、衣、と、い、ふ、事、
か、り、心、の、事、を、知、と、い、ふ、事、と、い、ふ、事、と、い、ふ、事、
忘、れ、へ、み、つ、ら、さ、尚、ら、う、て、お、れ、ど、う、の、の、の、親、と

此と、お、ひ、い、い、ん、の、後、世、と、い、ひ、の、今、
下、句、い、い、幸、つ、と、い、い、と、い、い、と、い、い、と、い、い、
何、と、い、い、と、い、い、と、い、い、と、い、い、と、い、い、
賜、娘、子、歌

奥幣 往還 去 伊麻夜 為妹 吾漢 有藻 卧束 鞠同 卷
二十天平元年 班田之時 使葛城王 從山背 國贈 薩

妙觀 命婦 等所 哥一首 副 芥子 裏
安可 祢佐 湏比 流波 多、婢 互 奴 婆 多 麻 欲 流

の伊 力來 仁都 賣流 芥子 訖 礼 ま、し、の 祝 詞 あり
我 弱 肩 太 手 次 取 掛 ち、し、り、お、お、し、幸、つ

正徳御代の事ハ先皇御
 の御代ニシテ入る所ニ
 細事トシテ記シテ
 予の御代ニシテハ
 予の御代ニシテハ
 予の御代ニシテハ

正徳御代ノ事ハ先皇御
 初御代ニシテ皇ノ宗皇ニある女ノ母ニ
 也

君ヲ為衣ノことニ
 此の御代ニシテ
 多光ノ御代ニシテ
 向ヘテ
 多光ノ御代ニシテ

正徳御代ノ事ハ先皇御
 皇考仁明天皇皇孫
 皇太后
 皇太后
 皇太后

譜

皇考仁明天皇皇孫
 皇太后
 皇太后
 皇太后

皇太后同六年一品同八年二月四日百官捧宝璽
 鏡劔等於一條宮五日奉迎新帝廿三日即位大

極反治平五 天皇廿而聽明好讀經史容止閑雅謙

恭和潤慈仁寬曠親愛九族性多風流尤長人事

之三代實錄畧文御治世四年而仁和三年八月山明五十四同

九月葬山城國葛野郡後田邑陵一云小松山陵諸陵

式云田邑々立屋屋小松原以上續日本後記以下三代實錄延喜式杖

桑畧記
等所見

中納言行平

立ころれいなその山乃家よりゆる松とりきり今

古今集離別歌一ら次

あらしとれゆくのといよその山とつひのけむと日曲とに給葉集

式抄波ホよゆとよとよひけ夕と今よゆと不よも

へてこらう夕次よつひのけありあれ因懐の国

の字よ任して京よりおしよ人ねとり高少見

かてり別を時さのしねるまよそこらうから

て家とゆとよきうの今いくはともうく之改

こまうてんいひと人をぬくさやそら

るうとく一不集卷三

門居カトニラ郎子ヲトノハ内尔ウチニ雖至痛之イタム者今還金カネ同

才十四相摸哥

多伎木許流可麻久良夜麻碓許太流伎半麻

都尋奈我伊波波女古冰於追夜安郎集これらの心

詞似るる取あり

因幡の山とりのみ初名集は因幡國法英記

稻羽波とき後拾遺集はあやのむけへしるよ

次はよ師そもかきいささるいさあよかああ

まをを合せてしれそけあの序あ波のやとち

は國府のゆりそこのいささるやとち

いれといぬてりゆりて才と回の句よは

改 六帖：年手分國の歌不入
ていささる國と山と名を日
國法英記のこ
古今集歌集の初因幡
伊多相も因幡の
ていささる
ていささる
茶のいささる
まとの年法州任の

む料よいぬそめあ山とふんよあくれさる

て式説よいさ後ああの稲系山ちり

いぬとやとふ奇と川とさの同名あはれといささ

葉後日本法記才十たはる後ああ見那伊京

波林とあれいささる山とさるれとれよいささる

は陸奥あちり今とあせる時ああああああああ

の小田在山尔今有昔とみ五分より並りみらの

山よここの花候とよみさるやとあさる山とあ

いらのく山とさる山とさる山とさる山とさる

二代実録あし七云齋衛二年春三月壬午従四位下在京朝

臣行平為因幡守とゆれ此の端より及んこと

にけきり任由より秩滿くゆ時四人のあを悟て物とゆれし

さうはまことあらんのかとゆれ説り長近遠より長く業龍

あのかよ入くるさうとゆれてあよりゆくとゆれり

あまのせりてあまことゆれ時のおとせんすゆれりさうの時

のくせりて額よりあまことゆれせんすゆれりさうの時

あせりてゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれり

伝はるゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれり

後醍醐天皇の御代にゆれりゆれりゆれりゆれりゆれり

ゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれり

ひよん

おぼろし君のゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれり

ゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれり

ゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれり

いそととさん

譜

父彈正尹四品阿保親王 平城天皇皇子 見續日本後記 母未詳天長

三年在原朝臣の性と賜 業平の傳 国史記録等

より仁明天皇御時正六位上より立て陽成

傳未詳曰母伊登内親王桓瓦
帝女也是ハ業平ノ母也
ハモ故妻ニ係リ

冠辭解よみ されり上古い人仁人又け河心
の古流を教ふして司るるよきなり
紫いしく疾い馬久きしなる古神の御人
よきなる方より古神を申すもけい冠辭
とかくしめぬなりぬ

のわく紅をわく海わくわく藍のよみ
より赤なるより白なるは先てしめ

紅花のくわく吾國より本れい其の藍とよみ
これこそ吾國のこころのわくわく又よみ
るく殊よりわくわくはこれなり
とよみわくわくはこれなり
紅中紅退紅といふ時の韓紅は紅
の名とわくわくはこれなり

譜

父行平郷又曰し母伊於門親王也三代実源
公之十七云元慶四年丑月廿八日辛巳從四
位上行左近衛權中將兼淡路權守在京朝
臣業平子業平者故三品阿保親王
業平曰平治紀傳云尹
三品而薨于時被賜一
品今作四品
者誤也
平丑之子云云位行中納言行平之弟也阿保

うら又ふ所

あつらふまゝのまゝにうらもふん着流を
ふま人のとくわし

發句胸勺の席よりうらむと夜を日禱

ふ言とをきぬうらふとふ河川万葉集

副兼守の字を司く即ちうらむもかぬ

うらむとわらわらう

うらむといふ系集は曲道とふまゝならん

うらむとけしうらむといふ人目と遊む弟とぬる

譜

在原朝臣内大臣中臣鎌子公一作鎌子天智天皇八年賜友

原氏日本紀

其男史公

け名は後日本紀に不比等とせしむるは原氏
より後世の信或はあひく或はあひひ

且大後原といふは等の子ありしとていふは原氏といふ
がて史の字の訓うらむとことうらむなり天

武天皇十三年賜朝臣姓日本紀及
姓氏録此史公の男

武智麻呂房前字合麻呂等より敏行朝臣の

其武智万呂の男 按察使富士万呂の子なり

右中門督四位より延喜七年より創るとして

御三代実録より仁和二年六月徙六位上左兵衛

権佐より右近衛少将小轉任せしむるとあり

後昇進ありつる一古今集よこの朝臣か
くこと名の下よあはれも四位ちまきけり

伊勢

物波浮籠よ声の節のるもあはれし世とらして

新古今集恋歌一しらば 高集よと歌き

みーぶ声のやーのるよーかーし

のあはれいのこもるよーあはれい

のあはれいのこもるよーあはれい

あはれいよあはれいよあはれい

んと切又恨しきさくら

こ登白いりよ君の飾とひく

はしよ大やーあはれいよきさくら

みーぶ声といり万葉集よ 吾野好男

床の角比束のるよ或いあひくよも乃か

しの際もとよゆるるちあてあしの際

のるれきう申よ籠ぶあしを没ああり

いしてけきよいあはれいよきさくら

あはれい

取よ侍せりし名とせしれし姫人今昔物語より
れう考後撰集の孝子院のゆりりるは湯解のあらし
まもせありしれ侍せ

侍せの海はひと侍あまされとくみ

つひつりしこみふいすも湯入れとらめ

父よはめていせは侍の心は侍お集り大いやと
んおとわかへま

て系内つりぬよ大和はおも
大和守よいはれる時よききくく
こ後撰拾遺集うしよ侍習の御島おとあらり孝子院のを
子をうしうれいこつわわううよいせの侍とらり御島と
りつとと異せなるえ又わね又辨よち福守
日侍とんいれいすての侍もゆりし

元良親王

こいのれいんを河姫成るみとつくまんをう

後撰集の事出さそ後よ京極の御島お

けういしんか

京極の島おの時平の女 寛平十三年

侍奉して稚の親之物の親と等とせし

おあそとい密道のゆりりれあるをいあ

入してあつとつらあはともあつとつら

とまう

高橋松平の御子
 御の御子に濁りあり
 せきしとみとらふ尾こ
 つの御子とくハ市な
 たりハ海の子と清
 くの子と濁りあり
 是音便よそをり

有田^田標柄折者搜求後去^レ是^レ水脈^水の折^リ
 ありては入^レ水^レの源^源を^レ追^追ひ^追ひ^追ひ^追
 脈之^脈之^之標^標の^の折^折り^り一^一方^方集^集ま^まる^る遠^遠津^津
 淡^淡海^海引^引依^依細^細に^によ^よみ^みふ^ふれ^れと^と新^新及^及津^津は^は太^太
 宰^宰府^府か^から^らて^て往^往來^來は^はの^の日^日多^多し^しれ^れは^はい^いは^はこ^こ
 むれ^れと^とあ^あら^らふ^ふ者^者ら^らり^りと^とあ^あら^らふ^ふと^とあ^あら^らふ^ふ
 も^もと^とい^いは^はら^らせ^せら^らは^はく^くて^てし^しり^り即^即
 ほ^ほら^らら^らす^すと^とい^いは^はら^らら^らす^すと^とい^いは^はら^らら^らす^す
 あり
 野^野田^田記^記の^の注^注を^を見^見る^るに^にあ^あら^らは^はる^る

譜

祝王^祝陽^陽成^成て^て皇^皇子^子一^一方^方日^日本^本記^記畧^畧よ^よ天^天慶^慶六^六年^年七
 月^月廿^廿六^六日^日壬^壬寅^寅三^三品^品兵^兵部^部々^々良^良親^親王^王薨^薨と
 り^り西^西宮^宮抄^抄裏^裏せ^せよ^よ延^延長^長七^七八^八年^年の^の以^以三^三品^品
 兵^兵部^部々^々と^とん^んし^し松^松遺^遺集^集大^大和^和抄^抄決^決等^等よ^よ兵^兵
 部^部々^々と^とり^りや^やそ^そ今^今の^の仰^仰奉^奉の^の三^三代^代実^実源^源を^を四
 十^十二^二よ^よ元^元慶^慶七^七年^年七^七月^月送^送四^四位^位下^下元^元良^良親^親王^王
 授^授送^送四^四位^位上^上り^りあ^あら^らを^を送^送ら^らり^り右^右宮^宮の^のな^なら^ら
 へ^へ位^位良^良親^親王^王と^とせ^せり^り是^是正^正也^也なり^りけ^け年^年
 陽^陽成^成て^て皇^皇子^子十^十六^六歳^歳よ^より^りに^に叙^叙位^位と^と入^入る^る

いよのまよとあふくは日新に歳品とあ
くせと送日信とあふくは日新に歳品とあ
きぬくは或はよとのあふくは日新に歳品とあ
あふくのあふくは日新に歳品とあ

赤い紙

今とんころりあふくは日新に歳品とあ

古今集を回覧しらす

あふくのあふくは日新に歳品とあ

これに昔の文のあふくは日新に歳品とあ
のあふくは日新に歳品とあ
あふくのあふくは日新に歳品とあ
あふくのあふくは日新に歳品とあ
あふくのあふくは日新に歳品とあ
あふくのあふくは日新に歳品とあ

古今集を回覧しらす
あふくのあふくは日新に歳品とあ

えよ今かつくしんこひーれきり
 こころのいふと福とにのきありけあを
 めよ川いふとこころを又けまら
 のしんこころとこころをすこのれよ
 て平のららり又晚ららりさあむせ
 めららりよいえのしんこころにららりあ
 りんこころ程してとよれ福のららり
 大いすまをきよそのしんこころにららり
 こころの月とを月とけりて夜の月を
 とこころのあやをよと夜と下の月とよけあ

ハサるに下の。あやを人ーけオに回向の傍に
 万葉集あり

七月の在的の月れをばはははー
 ちんあやと

の眼を今秘注は七月の夜れ長ふよまの
 月のあやを人をもととららりといひに
 理りよあやを害れー或説よまの月を
 的あやを一夜のあやをすいあやを月日
 をあやを秋と人七月の元よあやを海
 とこころのあやをひらり元古今集のあやを

以下説ハ繁仲の改イヘリ

秘注 喜るーとよまハ元
 自さしあやをいふは説
 大いすまをきよそのしんこころにららり
 こころの月とを月とけりて夜の月を
 とこころのあやをよと夜と下の月とよけあ

譜

杖桑畧記云寬平八年閏正月七日子日宮御幸
北野雲林院之通昭僧正在俗時子弘延素
性法師施度者各二人大和物流之通昭の事
と云ふことよいふ頃ころりりり時ときの子とももををり
ことこと右みぎ郎らう左ひだり近ちか將しやう監かんととりりてて居ゐりりててををりり向むか
かくかく世よいいままががりりととすすぬぬままととてて母ははももややり
ううりりれれいい法師ほふしの子こいい法師ほふしををりりととよよききととて
そそししとと法師ほふしををりりととりり又また杖桑畧記云

昌泰元年十月廿日太上天皇有御鷹將云

云直指宮瀧上皇臨發上皇勅曰素性法師

應住良因院石上馳使令令護護之之法師卓騎

参路以之上皇感歎感歎禪師禪師晚晚豈豈揚揚鞭鞭前前馳

行行勅勅曰曰相相隨隨者者惣惣是是白白衣衣禪禪師師祿祿須須以以假假俗俗法法

仍仍号号曰曰良良因因朝朝臣臣取取住住所所之之名名日日暮暮宿宿大大和和国国

多多市市郡郡右右大大將將山山左左也也勅勅曰曰良良禪禪師師者者和和歌

之名名士士也也宜宜為為首首唱唱以以慰慰旅旅懷懷即即進進和和哥哥也也

世世のの方方のの時時もも名名ををりりんん西西交交抄抄裏裏

也也もも内内のの日日はは已已にに以以屏屏也也ととかかりりんんとと

きあがりしとす

文屋康秀

吹らふ秋の葉もれしとどれし山にをありしと

古今集秋下是貞親王乃家世分合の句

秋の末ありしと吹てい必葉もれしとどれしと

いふとゆれし山にのちと麓とくふるふる

ふるふるふるふるふる

けり新撰万葉集ふい

秋丹秋の葉もれ之折れ者郁子山に緒荒芝

成監とあり 成はてふの流は信らう 古今古恒より才二の句

ぬくて葉もれしとあり 古集 集序に野

色の葉もれしとあり 今撰 秋のありしと

とせんと野人とのしゆんも偏ちりぬく

とつとゆんも時といつともうてを甚涼

なりぬる古今集と秋の葉もれしと

義とと費之自常の古今集の秋れ一とを我

友村回出遠くをせりしと

みこれのうしあをせりしと

うら 勢さく 菊ふも ちへと 約り 和

名抄又 郁子 一名 榎 和名 年岡 今 榎 郁 直

作 都 とあるいさく 新万の 以 ち ち

ひんと といはるよや 和名の 年字の 万

系集の 宇の 字と 誤て 年と 云ふる 所

も あり 是も 字と 誤り する 所

ふへ くれと 右 新 万 等 の 例 也

うら ちり け 此 通 音 ぶ ち へ と 誤り する

ん とも なる 弘に じ 下 想 ぐ 河 の 流 なる

し ち ぶ とも なる 弘に じ 下 想 ぐ 河 の 流 なる

うら ちり け 此 通 音 ぶ ち へ と 誤り する

ん とも なる 弘に じ 下 想 ぐ 河 の 流 なる

し ち ぶ とも なる 弘に じ 下 想 ぐ 河 の 流 なる

うら ちり け 此 通 音 ぶ ち へ と 誤り する

ん とも なる 弘に じ 下 想 ぐ 河 の 流 なる

し ち ぶ とも なる 弘に じ 下 想 ぐ 河 の 流 なる

うら ちり け 此 通 音 ぶ ち へ と 誤り する

ん とも なる 弘に じ 下 想 ぐ 河 の 流 なる

し ち ぶ とも なる 弘に じ 下 想 ぐ 河 の 流 なる

うら ちり け 此 通 音 ぶ ち へ と 誤り する

とて此の古河よりされとされいこのり
とめこのいけおよふいられまをいぬて
いぬとありとといふとそ中よりあるよまの
とてさるぬい荒まといふ者のうへとよのい
堀河内百そよ昆と秋よつれさるいけさよちりとな
ふ一ふふよいそゆとちりとありと川と人よあゆ
といりといふりちわぬいぬれぬよあれいぬいこよま
本のとぬいふふもいふ秋ゆぬぬこの山ゆぬとさるよ
ういめてあそとぬりぬれい其ぬれとさるて秋のゆぬ
入るよよとそと且ち秋といふゆぬあそとさるてさる
らむとぬいぬれ

とて此の古河よりされとされいこのり
とめこのいけおよふいられまをいぬて
いぬとありとといふとそ中よりあるよまの
とてさるぬい荒まといふ者のうへとよのい
堀河内百そよ昆と秋よつれさるいけさよちりとな
ふ一ふふよいそゆとちりとありと川と人よあゆ
といりといふりちわぬいぬれぬよあれいぬいこよま
本のとぬいふふもいふ秋ゆぬぬこの山ゆぬとさるよ
ういめてあそとぬりぬれい其ぬれとさるて秋のゆぬ
入るよよとそと且ち秋といふゆぬあそとさるてさる
らむとぬいぬれ

譜

文房真人の姓氏深又天武天皇をいふよ二

品長親王之後也といふ今の印本こそあま王と

ゆに左大臣とて深又とてあせぬあつた深くはしは深日

高又ぬりまといふるもいふ康秀のぬ

い先祖不見古今集よ参河橋とらんり

契仲云古今集よ上は二條后も春宮

の湯島ふと中時とゆりルらあまかいらの

高とゆりり二條后い貞観八年十二月為女

清元まえし年迄なれり其の言とゆしり
貞観 十年陽成帝 十一年にゆえま元年迄

らぶのるれゆぢりき身祝玉仁和天を
才二のゆまやうもか合の比七八十本
よもゆめく一具上菱万序と考あるは定ま
尚時 序は定年
五斗とあり 底あか合のちと撰あつと
ん白をせけあ入らう若げ次の方朝康と
在んち指はゆれは是も朝康とをせ撰れ
るるち中根はそくく一考らうこう友
筆影といふ系はゆるちんち指の古は
の中とともあつとんれに二とともは朝康
とわう一説ととも一と後まのんるちの書こ

著ししそぢゆのあいかととゆれいけ
端あゆめらうとと

大に千里

月いれいらよぬもあゆれこうあゆの秋よ
古今集秋上是身祝玉の家の方合のあ
一をああつとて天下れ也秋さるは月よい
いさあひといのちあゆめいさ
あゆめいとい月をんていとかあゆめ

此中一覽して...
此中一覽して...
此中一覽して...
此中一覽して...

その多岐に...

この...
この...
この...

秋無...
秋無...
秋無...

是より大...
是より大...
是より大...

又...
又...
又...

た...
た...
た...

ふ...
ふ...
ふ...

之...
之...
之...

の...
の...
の...

と...
と...
と...

と...
と...
と...

と...
と...
と...

と...
と...
と...

と...
と...
と...

と...
と...
と...

と...
と...
と...

と...
と...
と...

と...
と...
と...

と...
と...
と...

と...
と...
と...

と...
と...
と...

と...
と...
と...

と...
と...
と...

菅家

けつひいぬこころぬとも向山紅葉此流津のほゆ
古今集 新編 朱雀院系 良くおとす
り々時 向山 としてよりいゆる

この朱雀院は定家上皇とあり
侍之條の事あり 上皇は院より流津とされ
累代の後院あり 流津の名は中冷泉院以下の流津の例
ありひまふまをうけ

こころぬとも向山紅葉此流津のほゆ
古今集 新編 朱雀院系 良くおとす



とがらふとこころぬとも向山紅葉此流津のほゆ
古今集 新編 朱雀院系 良くおとす

樂山 傳歌

佐保過而草束の半祭尔置幣者妹

目不離相見深跡衣このおとす

とこころぬとも向山紅葉此流津のほゆ

相坂山よも向の山とよ名あること

ハコ良の歌乃時乃坂乃上まて徳也

とさり且猿く所人そこより

てもむいけ坂の頂上を即向の山と

自妙又け神もあつとるこしよいぬふんと用
集をこむよ

加思故美等能良受安里志辛義故思
治能多武氣尔多知立伊毛我各能里都
あねを公せそあしよといけこよも様あ
の人あし山のふねとまていよ向してつ
はがねしつらとねりてさるにちるれ
そことやそこひもふねく一信よ
山のしつらとふけあ向の香俊うす
矣神とこしつら辛未のあ向山のあまのゆめあり
と或はよしつらあらくい信の確

推の流る
うま

こけ湯なひ昌泰元年十月宮の御湯まの
次ては振はむ行を演へも信させせま
へいも及びあらのるりう人しあ性信作
あまいはしこの神をさる人なよとけし
とけなまこけらねと信あのとこり日中記畧
杖桑畧記等よるこあ性信あのをいせよ
しあせり

あまのつら
あまのあけら神や
うま

こけしつら院の庵徳助れい私のぬこいえ
らう具せず即此山の紅葉の流いよきぬこ

く又折らばしむ向て行らんしう家業の
ま向の祓り利名抄云道祖比依通云其
工氏之子好道抱坂其死後以爲祖利名佐信乃加美
又云道神唐頼曰禰音觴和名太無乃加美道上祭一
云道神也又其之臣也よゆこのいふとの
祓き是ハたむ記日中記等よいさぬまの
尊也其也ぬりよひてなる祓と道にち
らまの祓としひ比禰とよそちうとちう
祓とらまの祓とよそちうとちうとちう
ふれハた今案よ下の書乃道とばはる

きらりらまの祓ハたぬ福されぬ
裳の祓ともりや或かの比禰とちう
ひてぬりる祓とくぬれとの祓とよそちう
の祓と道の祓とて即旅路よま向とらひ
祓たりたの利名抄りよハ異國のいよゆ
道に日本の祓名よついでりりぬ
こまめくいよゆのいよふとらぬよて
まふおと道の一よゆとも用又ハ随念ともせり
んひりておひにきつとらふとたむたむとたむと
のふとまの言つとらふとたむとたむとたむと
よくぬとよふと
らららら

いりれい
しつとねあひひあひのあひくしんしんしん
いふかりりりしんあひことよりひいせしん
しんいまくぬるあまれのあひ集のあひあひ
へるあひもあひあひとせんをあひあひ
。下句の例ハ万系集あひ七あひ
遠近儀申在白玉人不知見依鴨

譜

父内大臣高友公カハニ三條右大臣

公定方



延長二年正月大納言より任右大臣兼平
二年八月薨

日本記畧杖朶略記等

